



Title	ソヴェト・マルクス主義における新動向の展開とその史的意義
Author(s)	中野, 徹三; Nakano, Tetsuzo
Citation	スラヴ研究, 5, 33-49
Issue Date	1961
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/4954">https://hdl.handle.net/2115/4954</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	KJ00000113157.pdf



# ソヴェト・マルクス主義における 新動向の展開とその史的意義

中 野 徹 三

## 主題と分析視角

本稿のテーマは、いわゆる「スターリン批判」の前後期より除々に展開されはじめたソ連におけるマルクス主義思想とマルクス主義的諸理論——哲学一般と史的唯物論、美学——の新動向を分析し、今後の展望を試みることにある。

1953～6年の時期に、いわゆる「非スターリン化」を必然化した諸要因の考察と関連して、ソ連社会で進行している諸変化のコースと深度にかんしいくつかの所論が提起されたが、Barrington Moor の分類<sup>1)</sup>を参考にわれわれはこれらを次の5説に分類する。

- a. ソ連＝全体主義国家観に立つ「不変」説。<sup>2)</sup>
- b. 全体主義的独裁の主たる執行者の不安定性と個人中心的性格から予想される体制の「解体」説。
- c. 上からの除々たる「立憲政 (Constitutionalism) 転換」説。<sup>3)</sup>
- d. ソ連は本質的に社会主義的民主主義国家であるが、スターリン晩年期の個人独裁が種々の弊害を生んだのであり「スターリン批判」はこの弊害を克服し、レーニン主義的原則に還ってその軌道を共産主義をめざして前進する、と述べる「原則還帰」説 (当時のソ連共産党の公式見解)。この場合「スターリン批判」は「重要な、しかしひとつのエピソード」とされる傾向に近づく。
- e. 第1次5カ年計画後のソ連の工業化の巨大な成果が、この間の「警察国家的体制」を不要な妨害物として意識するに到った結果が「スターリン批判」であり、社会主義的民主主義への本格的前進が向後開始されるであろうと説くいわば「発展」説。<sup>4)</sup>

1) cf. «The Annals of the American Academy of political and social science» 1956, Jan PP. 1～10

2) 「ソヴェト全体主義の統治方式は、抑圧と緩和という二者択一の局面の動的均衡を足場としているが、その本質的輪郭は不変である。」 (Merle Fainsod, *How Russia is ruled*, Cambridge, Mass., 1953, P. 500)

3) Moor はこの中に Issac Deutscher を入れている。なお、Moor 自身は、これらの3テーゼがいずれも国際情勢のインパクトを十分に評価していないと批判し、平和的共存が達成されるならば、工業化にともなう狭義の技術的合理主義と物質的生活水準の向上によって大衆を操縦する「全体主義的民主主義」が完成されるが、それが疑わしい場合には「その最も独断的・テロリスト的様相の若干の縮少を伴う旧式のスターリン主義的全体主義の存続が予想される」 (cf. *ibid.*, P. 10) とし、後者の方がいっそう可能性が強いと述べている。

4) cf. P. Sweezy, L. Huberman, : *The U. S. S. R. after the twentieth Congress of C. P. S. U.*, «Monthly Review», 1956, No. 7

ところで、スターリン死後すでに7年を経過した現在、これらの諸説はいかなる「歴史の批判」を蒙ったであろうか。

どのような立場に立つ者であれ、現在のソ連が巨大な変革過程にあること、そのなかでソ連の社会的、国家的力量がめざましい発展を遂げつつあることを否定できる者はいないであろう。

1959年1～2月に開かれたソ連共産党第21回大会は、ソ連が「その発展の新しい、もっとも重要な時期—共産主義社会を大規模に建設する時期にはいった」<sup>5)</sup>ことを確認し、新7カ年計画においてはソヴェト権力成立以来の全期間の投資総額にひとしい大規模な投資(3兆旧ルーブル)が予定されており、同時に生活水準の飛躍的向上がめざまされている。(週35時間—5日労働制への移行等々)。

この期間のソヴェト科学・技術の圧倒的成果については、第21回大会におけるフルシチョフ首相のつぎの誇らしげな言葉がもっとも雄弁に事態を物語っている。

「さいしょの地球の人工衛星はソヴェトの衛星(スプートニク)だった。太陽系のさいしょの人工惑星はソヴェトの惑星である。

ソヴェトの人工惑星は、宇宙のはてしない空間を、ソ連邦の国章と「ソヴェト社会主義共和国連邦1959年1月」と大書した吹流しをつけて誇らしげに運行している……」<sup>6)</sup>

民主主義と民衆の創意のいっそうの進展を告げるものは、政治警察の廃止を出発点とする治安・行政機構の縮減と簡素化、国家的機能の社会团体への移行の開始、そして第21回大会前に全土にわたって展開された「新7カ年計画」の大衆討議<sup>7)</sup>、不断に各分野で実行されている大衆の創造的イニシアティブの発展<sup>8)</sup>、授業料廃止(56—57学年度)につづく国民教育の量的・質的向上等々であろう。

ここに、a、b説の破産はほぼ明らかであろう。これらの諸変革が、まさにソ連社会の内部的力によって進められた事実は、非科学的抽象性に立脚する「ソ連=全体主義的独裁国家観にあらたな痛打を浴せるものである。

さらに、b,c説は、ソ連社会の諸変化を規定する根本的要因——社会主義経済建設とその全社会生活におよぼす革新的射程を評価し得ぬために、たかだか「全体主義のたそがれ」<sup>9)</sup>、西欧的社会へのジグザグの近接を予想するのみであった。

それゆえに、これらの学者たちは、最近のソ連社会におけるいわば「オーソドックスでないもの」——青少年における「ビート族」の出現、非行、性問題等々、または文学

5) 「ソ連邦共産党第21回大会決議」合同出版社、第1分冊、P. 214

6) フルシチョフ「1959年から1965年にいたるソ連邦国民経済発展目標数字について」合同出版社第1分冊、P. 19

7) 同上、PP. 23-24

8) 「……無数の労働組合評議会と労働組合委員会はすでに機械、用具、及びその生産物の技術的水準の大衆的管理を開始している。…1958年に創立された発明家と合理化立案者の連合協会は、130万人以上のメンバーを統合している。……実現された提案総数は1958年には前年に比して18%増え、その結果収益はおよそ20%増えた。」(B. Прохоров, Рабочий класс в борьбе за технический прогресс, «Коммунист», 1959, No. 12, стр. 53-55)

9) アイザック・ドイッチャー「変貌するソヴェト」みすず書店、P. 4

ソヴェト・マルクス主義における新動向の展開とその史的意義

におけるパステルナーク問題など——に注目し<sup>10)</sup>、ここにソ連社会のいわば「非共産主義化」の萌芽を認めようとする傾向にある。

しかしながら、「スターリン批判」を「原則への還帰」として評価する d 説にも、幾多の難点が存在することも確かである。

第 20 回大会が戦争の不可避性、暴力革命の必然性などに関するレーニンのテーゼを修正したことは周知であるが、社会主義の世界体制化、現代の科学技術にもとづく工業化の急速な進展、大衆の文化的水準の向上とは、ソ連社会内部においても「スターリン批判」以後、単純な「スターリン晩年以前期」の諸状況の延長的発展ではないあらたな諸要素を導入した。ここにマルクス主義の「原則」と「発展」をめぐる微妙な、しかし深刻な問題性が胚胎している。<sup>11)</sup>かくして、53—60年の期間のソ連の論壇は、教条主義批判と修正主義批判とが相交錯するめまぐるしい舞台となったのである。

本稿は、以上の状況認識を前提として、マルクス主義的思想、理論体系の分野に現われた新動向を分析し、ソ連社会の諸変化が伝統的なマルクス主義思想体系とその前提たる「人間学」にたいしいかなる深度までの変容を促すかを追求し、この分析を通じて逆に現在の諸変化を思想史的方法によって測定することを目標とする。

新動向が極度に微妙なニュアンスの差として発現すること、<sup>12)</sup>またそのなかに今後普遍化する可能性を持つファクターと偏倚的、偶然的一単に偶然的ではないが——ファクターとがからみ合うため、この分析は現状においてはやはりひとつの冒険であろう。

分析の視角として、わたくしは社会的変化が理論的問題圏およびその人間学的基底をいかに変化させ、それが伝統的テーゼとその体系にいかなる変容をおよぼそうとしているかに着目し、典型的傾向を若干「理想型的」に抽出しつつ検討を進めたい。

なお、分析対象はここでは、哲学の一般的動向と特に史的唯物論の理論体系、そして美学の分野に限定する。

## 1. 哲学の全般的領域の新動向

ソ連哲学界において、スターリン死後の新風は、53年より除々に準備され、Арексис-андоров の文化相就任<sup>1)</sup> という状況の下で自由討議の活発化を呼び覚めつつあったが<sup>2)</sup>

10) たとえば《The American Slavic and East European Review》誌の諸論文(59—60年)を参照せよ。

11) 57年の「12カ国共産党、労働者党の宣言」と60年の「81カ国共産党、労働者党代表者会議の声明」とは、まさにこの問題をめぐる緊急な国際的意志統一の必要の産物でもあった。

12) マルクス主義的理論に精通していない人にとっては、この「差」はほとんどネグリジブルなものに見えるであろうが、「自然法」概念の微妙な転換が中世の世界像より近代的世界像への移行において占めた重要な意義に関するボルケナウの研究その他を引用するまでもなく、思想史においてはまさにこの萌芽の分析が鍵であろう。

1) 54年3月、マレンコフ路線に終止符が打たれた55年2月直後、解任され、Михаиров が文化相担当となった。

2) この期間の主要な新動向と見做し得るものは、「形式論理学論争」を通じての形式論理学の一定の妥当性の承認、哲学者、科学者による「相対性理論合同討論会議」の開催などであり、「哲学史」出版準備も進められた。

ソヴェト哲学界にはじめて明瞭な進路が示されたのは、1955年——マレンコフ路線の終末直後——である。

1955年の《Коммунист》第6号巻頭論文は、哲学的問題に関する久しい沈黙を破って一方において「教条主義的引用学」に墮したソヴェト哲学に批判を投ずるとともに、自由論議があくまでもマルクス＝レーニン主義の枠のなかで行なわれることを強調して「修正主義批判」の口火を切り、哲学論争のコースを指示した。「……彼らの哲学の剣は錆で蔽われている。……寒々とした《引用学》が彼らの商売道具となった。彼らは、今日は文献を大空高く持ち上げ、明日はたちまちバラバラに引き裂くといった具合に、彼らの意識を処理しているのだ。」<sup>3)</sup>

同時に、論理学論争に関連して、「……弁証法的論理学の否定、形式論理学による弁証法的論理学の代置は、マルクス＝レーニン主義の哲学的基礎とマルクス主義党の政策のはなはだしく粗野な、きわめて危険な俗流化に導く。……初期には——いづらか言葉を曲げていえば——マルクス主義の限界内での意見の葛藤と見做されたものは、今は完全にその限界を越えて進んだ。……われわれはこの誤った傾向に決定的な終止符を打たねばならぬ。」<sup>4)</sup>

実生活の結合による教条主義の克服と、マルクス＝レーニン主義の哲学的基礎の擁護——このスローガンが、以後のソヴェト・マルクス主義の基調となり、同時に新動向の枠組みを決定した。

ソヴェト哲学のその後の動向を特徴づけるために、ひとつの統計的指標を挙げて見よう。下表は、54年、57年、59年の各年に《Вопросы Философии》誌に掲載された全論文（「学界動向の紹介」と「書評」を除く）を、項目別に分類したものである。<sup>5)</sup>

[ ] 内は構成比を示す。

	1954	1957	1959
編 集 部 論 文	5 [6]	6 [6]	9 [5]
弁 証 法 的 唯 物 論	12 [14]	14 [15]	23 [13]
自 然 科 学 の 哲 学 的 問 題	18 [21]	22 [23]	44 [25]
史 的 唯 物 論	18 [21]	24 [25]	38 [22]
美 学	8 [10]	5 [5]	7 [4]
哲 学 史	14 [16]	6 [6]	27 [16]
ブルジョア哲学及び修正主義批判	10 [12]	19 [20]	26 [15]
計	85 [100]	96 [100]	174 [100]

3) Насущные Вопросы Философской Науки, «Коммунист», 1955, 5, стр. 22. G. L. Kline は「1945—50年の間に提出された1,000余の哲学論文（うち50が学位論文, 950が候補論文）のうち, 出版可能のものは100に過ぎなかった。」と述べている。(cf. G. L. Kline, Recent Soviet Philosophy, «The Annals of American Academy of Political and Social Science», 1956, Jan. P. 137)

4) Против путаницу и вулгаризации в вопросы логики, «Вопросы Философии», 1955, 3, стр. 163-171

5) 「現代ソヴェト哲学」大月書店, 各巻末の文献目録による。なお, 58年度から, «В. Ф.» 誌は隔月刊より月刊になった。

ソヴェト・マルクス主義における新動向の展開とその史的意義

この表を足場として検討するならば、第1に、自然科学の哲学的諸問題を取扱った論文数は飛躍的に増え、構成比も21→25%と高まっている。そして、その内容も、54年当時に比しはるかに専門化している。(54年当時には、純然たる自然科学的問題に関する哲学的論文はほとんどないが、59年度には、「素粒子の相互作用が弱い場合における偶奇性の非保存」「生物学的研究における数学的方法の役割について」など高度に専門的な諸論文によって充されている。)

自然科学者と哲学者との間の久しい理論的疎遠は<sup>6)</sup>53年の「相対性理論」をめぐる合同討論会議以降除々に回復されつつあり、58年には「現代自然科学の哲学的諸問題にかんする全連邦会議」が600名の参加の下に開かれた。<sup>7)</sup>

かかる変化が、ソ連の社会主義経済建設の高度化によって要請され、同時にそれを支えていることは確かであろう。

第2に、個別科学および実生活と哲学との結合の深化は、編集部論文および弁証法的唯物論を取扱う諸論文にも端的に反映され、54年に見られた「自由と必然性の問題のマルクス＝レーニン主義的解釈」というような解釈学的論文は姿を消し、59年には「オートメーション化と技術の進歩に奉仕する論理学」という題名から想像されるように、サイバネティクス、ゲームの理論などの研究を含む専門的論文が増え、全体に占める比率も減少している。

第3に、史的唯物論にかんする論文の比重はほぼ変わらないが、その内容には重要な変化の徴候が看取され得る。(次節で分析。)

第4に、哲学史研究の分野であるが、53—4年に再び活気を取戻した哲学史研究は、研究対象を拡大し、特に西欧哲学史にたいする独断的態度を次第に克服しつつ、<sup>8)</sup>57年より長大な「世界哲学史」の刊行を開始している。なお、マルクス主義の成立＝発展史にかんする研究においても、以前に存在した「マルクス・エンゲルスの先行者たちの役割を過少評価し、マルクス主義の創設者たちの諸観念を<世界文明の発展の大道>から切り離す傾向」<sup>9)</sup>を除々に克服しつつある。

第5点として、ブルジョア哲学批判、および57年以後強められた修正主義批判は、ソヴェト哲学界の重要な部分を占めていることが推察される。しかし、その内容を見るならば、以前のかかなり独断的な批判に比し、批判の内在性は漸次強められてきたといえ

6) 「自然科学における討論は、哲学者の積極的参加なしに進められている。……哲学者と自然科学者との関係には若干の弱体化が現われている。」(Насущные вопросы философии науки, «Коммунист», 1955, No. 5, стр. 19-20)

7) 「現代ソヴェト哲学」大月書店第5集参照。

8) 「最近—(「スターリン時代」を指すと考えられる)—外国の文化及び科学の諸成果にたいするひとしくあやまったニヒリスティックな態度、そしてこれと関連して、西欧の哲学思想史にたいするあやまった態度が若干ひろがっている。」(Повышать идейно-теоретический уровень исследований по истории философии, «В. Ф.» 1955, No. 3, стр. 6-7)

9) Е. П. Кандель. Обзор советской литературы о жизни и деятельности основоположников марксизма, «Вопросы истории К П С С», 1959. No. 6. стр. 73

10) なお、ブレハノフ再評価が始まったほか、観念論研究の必要も強調され(См. «В.ф». 1955, No.3 стр. 7) 20年代のソヴェト理論家の再評価も緒に着いた感がある。(См. Александр Лебедев, А. В. Лун ачарский—теоретик искусства и художественный критик, «Искусство», No. 2, 1959.)

るであろう。<sup>10)</sup>

なお、本表によっては明らかにされないが、53年以後、国際学会にたいするソ連哲学者の参加は急速に活発化し<sup>11)</sup>、外国文献の紹介、翻訳もかなり進んできた。

これらの動向から帰結し得る命題の第1は、マルクス主義哲学の「啓蒙時代」の終末、教科書的マルクス主義からの袂別が進行しているということである。

そして、従来の「弁証法的唯物論」の抽象的解釈学は、今後ますます実生活と個別科学との具体的結合のうちに姿をひそめ、認識論は認識過程のいっそう実証的な研究、解明に向いつつ、カテゴリーの再編成、豊富化へと進む<sup>12)</sup>であろうと予想される。

また、反映論のテーゼの抽象的反復に終っていたソ連哲学の認識論には「党の思想上・教育上の活動をつよめること。勤労者、まず第一に未成年者の共産主義的意識をたかめること。労働にたいして共産主義的態度をとり、ソヴェト愛国主義と国際主義の精神に立つようにかれらを教育すること……」<sup>13)</sup>という第21回大会の決議にもとづき、倫理学の建設が焦眉の課題とされるに到っている。<sup>14)</sup>

美意識とともに、かかる価値的意識の研究は、マルクス主義的認識論＝反映論への深刻な問題提起となるであろう。

「哲学と実生活の結合」は第21回大会以後、特に力をこめて強調され、大会直後の論文「共産主義の全面的建設——哲学研究の基礎」<sup>15)</sup>は、哲学者の実証研究の進行を指摘して次のように述べている。「……ソ連アカデミー哲学研究所は、最近、次のようなテーマに取り組んでいる。——<労働者階級の文化的、技術的水準の向上>（ウラル地方の工業企業を対象）、<社会主義から共産主義への移行に際しての個人的なものとの社会的なものとの統一>（リャザン地区のコルホーズを対象）、<人間の意識における資本主義的残渣の根強さの原因>（モスクワのダイナモ工場を対象）。……現在とはくに、ソヴェトの現実の社会学的研究が緊急の問題となっている。

共産主義建設の理論的問題にかんするすべての論文、モノグラフィーは著者の《問題にたいする》抽象的な考察の成果ではなく、実践的経験の、生きた事実の普遍化の成果でなければならない。……ソ連共産党第21回大会の諸文書は、ソヴェト社会の現在の発展段階においては、科学的共産主義の理論は、マルクス主義の構成部分中第1の地位に引き上げられることを証明している。」<sup>16)</sup>

哲学の社会学化すら感じさせるこの文章は、「ソヴェト社会の現在の発展段階においては」という限定があるように本来の哲学的要求に矛盾する契機をはらみ、将来の是正を予想させるが、実生活と遊離した抽象的解釈学は、この変化を媒介として次第に姿

11) 「ことなつた国々への哲学者の間の結びつきの発展と強化のために」(『哲学の諸問題』1958, No. 2, 「現代ソヴェト哲学」第4集参照。)

12) 「現代ソヴェト哲学」第5集のコブニン、ゴルスキー論文などを参照せよ。

13) 「第21回大会決議」合同出版社版第1分冊, P. 221

14) 「現代ソヴェト哲学」第5集のシンキン論文参照。

15) Практика развернутого строительства коммунизма—основа философских исследований, «В. Ф.» 1959 No. 3

16) Там же., стр. 4-5

を消し、その後の変貌を生み出すであろう。

すなわち、今後の哲学界の第1の研究テーマは、共産主義への移行の法則性の究明にあるとされる。この論文は、さらに、今後の研究テーマとして、次の4つを指摘している。

2. 新しい人間の形式にかんする研究（倫理学建設）<sup>17)</sup>
3. 哲学的知識の普及。
4. 科学の発展の普遍化。

先に検討した第1点と関連して、次の見解は興味深い。

「現在における科学の発展は、ますます進行する専門化によって特徴づけられるとともに、世界の普遍的関連性と統一性を反映する諸科学の有機的関連性から生じ、種々の科学の境界領域に発生する新しい科学の成立によっても特徴づけられる。……とりわけこのことは、自然科学の哲学的諸問題が哲学の独立的領域を形成する、という事実のうちに現われる。……すべての具体的科学の哲学的諸問題、および哲学との境界に発生する諸問題を仕上げることは、ソヴェト哲学者の緊急の課題である。……」<sup>18)</sup>（強調筆者）

5. ブルジョア哲学と社会学の批判。<sup>19)</sup>

ソ連社会における「共産主義への移行過程」が、ソヴェト哲学を実証科学にますます近接させつつあることは以上で明らかである。そして、問題は、他方においてソヴェト哲学が課題としている、特に新しい世代をめざしての共産主義的世界像・人間像の形成の任務が、ブルジョア哲学・科学との今後予想されるいっそうの接触、ソヴェト市民社会の変貌の中において、伝統的世界像・人間像をいかに擁護しつつまた変容を受けるのか、というもっとも微妙な問題にある。

この問題に近づくためには、史的唯物論、美学・文芸批評の領域にさらに若干立入って検討を加える必要がある。

## 2. 史的唯物論の分野の新動向

史的唯物論の分野に視座を移すならば、

第1に、マルクス主義的社会学の建設という課題が57年より重要な論点として登場してきた。《B. Φ.》誌57年5号において、Kyczinskiは「社会学的法則について」と題する論文を發表し、経済法則と区別された社会学的法則が存在すること、それは「社会の領域全体と自然および思考の領域との間の関係」<sup>1)</sup>を規制するものであること、を主張した。これにたいし、多くのソ連哲学者は、史的唯物論こそが真の社会学である、と反論したのであるが、<sup>2)</sup>58年には「ソヴェト社会学者協会」が設立され、国際社会学会連

17) 「……しばしば、若いひとびとの間では、知識を獲得しなければならないと説かれているが、共産主義的労働、学習、生活の習慣はほんの片隅に置かれ、共産主義のたのの闘争の道徳的資質ははなはだ不十分にしか展開されておらない。」(Там же., стр. 8)

18) Там же., стр. 9

19) 「この領域での仕事のもっとも本質的な欠陥は、われわれのカードルが、資本主義諸国に現われている新しい現象、過程をあまりにも僅かしか研究していない、というところにある。」

(Там же., стр. 9)

1) 「現代ソヴェト哲学」第4集 pp. 78-84 参照。

2) 同上, pp. 84-90 参照。

合に加入した。

経済学的研究とは区別された実証的・社会学的研究の必要を説いた M. Д. Каммарь の論文は、社会学的研究がソ連社会の内在的の必要から促がされたことを極めてヴィヴィッドに描いている。

「……共産主義の實踐そのものが、社会生活全体のあらゆる側面を包括するような、ほかならぬ総合的、社会学的な諸研究を行なうことを、ますます強く要求する。生産力を全国にわたって合理的に配置する任務、経済地区を区分し、あたらしい工業地帯を極東につくり出す任務、あたらしい都市を建設しふるい都市を再建する問題、都市を整備し、文化をたかめ、社会主義的生活様式を組織し、生産点における生活様式と労働条件を改善する問題が、その例である。……われわれにとってとくに必要なのは、生活そのものを具体的に研究し、大小の工場に、鉱山、コルホーズ、ソフホーズに、都市と農村に、人びとの生活様式や文化におこる諸変化を、具体的に検討することである。……」

3) (強調原文)

ここでは、史的唯物論の一般法則でも、単なる経済法則でもない、いっそう複雑な社会的諸関係の具体的＝全面的な認識がめざされている。

ソヴェト哲学は、生産諸関係および経済法則の一元論的支配から脱却しようとする段階に入った、と考えられる。さらに注意すべきことは《быт》(生活様式)という概念が登場している事実である。

社会の生産様式にとどまらず、生産＝分配＝消費の全様式にまで視圏が拡大されつつあることのうちに、われわれは、ソ連社会が生産の増大に全力を傾注していた時代から、同時に消費生活の質的、量的な大幅の改善も当面のプログラムに織り込んだ新時代への推移をはっきりと確認し得るのではなからうか。<sup>4)</sup>

第2に、史的唯物論の「カテゴリー」研究が本格化し、重要な新動向が出現している。

《В. Ф.》1956年第6号に、В. Ж. Келле, М. Я. Ковальзон は、「史的唯物論のカテゴリー」というすぐれた論文を発表し、史的唯物論のカテゴリー研究の貧困を論じ、<sup>5)</sup> 「スターリン時代」に「万能」であった「土台、上部構造」カテゴリーの絶対化を批判した。一切の社会現象を「土台」または「土部構造」の「プロクルステスの寝床」に押し込もうとした傾向を批判しつつ、Келле, Ковальзон は「一般に史的唯物論の諸カテゴリーは、それ自体としては諸抽象であり、社会生活の現実的、具体的多様性の一面的反映である」<sup>6)</sup> がゆえに「これらのカテゴリーの絶対化、一切の社会現象を土台と上部構造のカテゴリーに押し込もうとする試みは、若干の哲学者たちをして、マルクス主義的

3) 「現代ソヴェト哲学」第4集, pp. 97-98

4) 《Быт》は生活様式、慣習、習俗という意味を持っているが、この言葉は Констанчинов 監修の「史的唯物論」第1版(1950年)にはなく、第2版(54年)第4章に登場している。

5) 「われわれは、1947年以来刊行され続けてきた《哲学の諸問題》誌においてのみならず、20年以上にわたって刊行された《マルクス主義の旗の下に》誌上にも、史的唯物論の諸カテゴリーを専門的に取扱ったただひとつの論文も含まれていないという事実を指摘するにとどめる。」(В. Ж. Келле, М. Я. Ковальзон, Категории исторического материализма, «В. Ф.» 1956, No. 6. стр. 18)

6) Там же., стр. 19

歴史観を歪曲させる結果に導いた」<sup>7)</sup>と述べている。

「社会学的研究」の必要性の提起とともに、この指摘は社会生活の全面的認識に向けて上昇しようとする本質的に新しい前進の芽であって、これにたいし、上部構造の連続性を説明するために、上部構造を「連続的要素」と「非連続的要素」に分解する試みは古い思考の「連続性的要素」の存在を示すものである。(空間的、平面的思考様式)。

ここに、従来の史的唯物論の体系で排除されていた諸カテゴリーが次第に復権の徴候を示してきた。<sup>8)</sup>

次に、**Б. А. Чагин, А. Г. Харчев** の論文「生産力と生産関係のカテゴリーについて」においては、伝統的な生産力、生産関係カテゴリーの内容にかんする重要な修正意見が提出されている。

スターリンが「生産力」カテゴリーを人間と生産用具に限定したのにたいし、彼らはその中に労働対象を含めることを要求している。「……それゆえに、生産諸力は、生産者と生産手段(労働対象+労働手段—筆者)との歴史的、具体的総体と規定される。…例えば、カザフスタンの生産能力は、この地域の生産における労働対象の特殊性を知らずして、どのようにして特徴づけられるであろうか？」<sup>9)</sup>労働対象に転化した地理的環境は生産力に包括さるべきだと説く2人の見解が、やはりひとしくソ連の経済建設の現実に根ざした発言であることは明らかである、——次のフルシチョフの言葉と比較せよ——「…今後7年間に、前例のない大規模な建設事業をおこなうので、われわれは生産力の配置にとくに注意深くとりくまねばならない。第20回党大会は、東部地域の巨大な原料資源と動力資源を力づよく開発し、経済的利用にひきいれる必要を指摘した。この指示は着々と実行されている。シベリアとカザフスタンに第3の冶金基地をもうける活動が展開され、アンガラ川とエニセイ川に世界最大の水力発電所が建設されている……」<sup>10)</sup>

生産力概念のかかる規定が妥当であるか否かは措くとしても、労働手段にのみアクセントを置いた従来の生産力概念では、原料、動力のごとき実際の生産に重大な影響をおよぼす要因を正しく位置づけることは不可能であり、旧式のテーゼはここでも実生活との遊離を自ら暴露しているのである。

**Чагин, Харчев** は、次に生産関係のカテゴリーにたいし、大胆な問題提起を行なっている。「……社会発展の歴史は、このように生産諸関係が決して私的所有者と直接生産者間の関係に限定されるものではなく、一見現われるよりもいっそう複雑であることを示している。」<sup>11)</sup>彼らは、生産諸関係を次のように分類した。

第1の側面——所有諸形態

第2の側面——「直接生産者間の分業と結合している諸関係」

7) Там же, стр. 29

8) 「家族」のカテゴリーが、**Констанчинов** 監修「史的唯物論」第2版に現われた(第1版には独立の項目としては全くない)ことは、そのひとつの徴候であった。

9) **Б. А. Чагин, А. Г. Харчев, О категории «производительные силы» и «производственные отношения», «В. Ф.» 1958. стр. 11-12**

10) 「第21回大会報告」合同出版社, 第1分冊 p. 52

11) **Чагин, Харчев, Там же, стр. 12**

第2の側面は、さらに次の各種に分れる。

- a 技術者と労働者との関係。
- b 生産者間の関係（「分業の基礎の上に、企業内部で、企業間で、種々の産業部門間で成立つ生産者間の関係」）
- c 社会主義的競争。

第1の側面は、生産手段の所有諸形態にもとづく関係であり、史的唯物論の原則的部分に属する。しかし、生産手段の所有諸形態が同一であっても、技術の変化等々による生産諸関係の変化の側面は存在するのであり、この点を無視するならば、オートメーション化にともなう企業内部の生産者間の諸関係の変化を表示することは不可能となる。「この関係（第2の側面を指す——筆者）は、技術的領域における変化にたいしていっそう「敏感」であり、第1の側面よりいっそう速やかにこの変化に反応する。」<sup>12)</sup>

この分析は、生産諸関係を所有形態にのみ還元していた伝統にたいする1種異様な輝きすら持つひとつの反逆である。

社会革命前のマルクス主義思想にとっては、搾取の根源としての生産手段の私的所有形態の曝露と攻撃、私的所有の廃絶を眼目とする社会主義革命の任務の宣伝が中心課題とされていた。歴史的状況の変化は、この第1の側面の陰に押しやられていたいっそう多面的な生産諸関係の諸規定を前面に引き出しつつある。

この事態は、経済法則を生産諸関係の運動法則と解し、生産力の規定と経済法則との関連を具体的に追究する作業を怠っていたソヴェト経済学界にも新たな対決を迫っている。Л. Леонтьев が「経済学理論の若干の問題」と題する論文のなかで「社会主義建設の全歴史は、社会主義の物質的、技術的基礎の特質を解明し、その根本的特徴と特性とを分析し、その発展と共産主義の物質的、技術的基礎への転化の法則性を研究することが、社会主義経済学の中心課題であることを、疑問の余地なく示している。……

若干の経済学者たちの間には、社会主義の物質的、技術的基礎を、何か経済学の領域外にあるもののようにかたづける傾向がまだ残っている。」<sup>13)</sup>と批判していることは、その一証左であろう。

もうひとつの「社会的存在」——「社会的意識」というカテゴリーをめぐって Тугаринов が提起した問題も、社会的存在を「土台」＝生産関係に一元化する理解への対立として評価できる。<sup>14)</sup>

しかし、Тугаринов の主張で特に注目に価するのは「社会的意識」の二段階の区別であって、ここで彼は、社会的意識を意識一般に還元する傾向を批判し、イデオロギー論の独自の領域の明確化に一步踏み出していることである。「……レーニンは、おのおのの理性ある存在の特性という意味での意識と、その中で人間が生活し活動する社会関係の本質を理解するという意味での意識をはっきり区別している。……わが国の哲学お

12) Там же. стр. 13

13) Л. Леонтьев, Некоторые проблемы экономической теории, «Коммунист», 1958. 16 стр. 44

14) В. П. Тугаринов, О категориях «общественное бытие» и «общественное сознание», «В. Ф.», 1958. No. 1

よび社会科学上の文献にひろく普及しているのは、意識一般と社会的意識の同一視である。」<sup>15)</sup>

久しく「社会的意識＝社会的存在の反映」というテーゼ——反映論の社会生活への粗雑な適用——<sup>16)</sup>によりかかっていたソヴェト哲学のイデオロギー論は「社会的ムード」<sup>17)</sup>「世論」<sup>18)</sup>義務、良心などの倫理学的カテゴリーの解明<sup>19)</sup>に迫られ、ようやくイデオロギーの独自の、価値志向的、存在超越的性格の分析へと舵を向けようとしているかのように見える。(ソヴェト哲学における「認識論主義」の克服。)

以上、われわれは、史的唯物論の分野においても、旧来の諸カテゴリーと体系の一面的性格を打ち破って、社会主義経済建設が人間の全社会生活の領域をあますことなく包括する全面的、具体的認識を要求していること、特に生産力と技術の急速な発展、市民生活の変貌過程がカテゴリーの具体化ないし新カテゴリーの成立を促していることをほぼ確認し得たと思う。同時に、イデオロギー論の本格的展開が迫られている。

実証的研究の質的、量的発展——それはソ連の社会＝人文科学界に新しい研究分野と科学を発生させるであろう——は史的唯物論の現代的方法論化を要請し、新世代の出現と「共産主義的人間」形成の任務とは、新鮮なヴィジョンを——あらたな社会＝人間像の体系化を促進する。ここにわれわれは、現代ソヴェト史的唯物論が、一種の「技術学」と「イデオロギー論」への分極化と統一の動的緊張のうちに置かれていること、<sup>20)</sup>このダイナミクスを通じてあらたな再編成へと向う過渡期に入っていることを確認できるであろう。

さらに、考察を新動向の思考様式に進めるならば、全社会過程を基本的な一関係を表現する少数のカテゴリー（「土台、上部構造」など）に一元化して押し込め、このカテゴリーを実体化＝固定化させる静的な構造分析にたいして、過程論的＝機能論的分析、<sup>21)</sup>動態分析に力点を置く思考様式が現われており、伝統的体系のいささかビザンチン風の構築の間に「春の嵐」<sup>22)</sup>のように吹き注いでいる。

しかし、以上の分析から浮びあがってくるように、物質的、経済的、技術的領域より

15) Там же, стр. 24

16) この点については「思想」1959年12月号の拙稿を参照されたい。

17) 「現代ソヴェト哲学」第5集のパレイギン論文参照。

18) 同上、ウレドフ論文参照。

19) 同上、シンキン論文参照。

20) 史的唯物論の対象の問題をめぐる最近の論争は、この意味で注目に値する。史的唯物論がマルクス主義哲学の一部であること、研究対象が「社会発展の一般的法則」であることについてはソ連哲学界はほぼ一致しているが、史的唯物論を弁証法的唯物論から分離し、個別科学に解消しようとする傾向にたいしこの一般原則の強調に力点を置くもの、(См. Г. Е. Глезерман, К вопросам определению исторического материализма, «В. Ф.» 1960, No. 3) 史的唯物論のカテゴリーを哲学的カテゴリーと社会学的カテゴリーの両者に分類しようとするもの(Тугаринов の見解、「現代ソヴェト哲学」第5集のナルスキー論文)などが論争を続けている。

21) 一例として、東独の新進学者による「文化概念規定」を挙げよう。「文化とは、相互独立的に存在する諸現象の寄せ集めでなければ、また特定の諸現象の単なる総合でもなく、その経過および結果が客観的文化財のうち対象の形態をうけとる自己発展的過程である。」(Erhard John, Der wissenschaftliche Kulturbegriff, «Deutsch Zeitschr. f. Philos.», 1958 Heft. 4, S. 562).

22) Овечкин の最近の小説の名。

の旧体系へのインパクトはかなり顕著であるのに比して、イデオロギー論の分野における新動向は遙かに微弱な影響しかおよぼしていない。われわれはつぎに、美学の分野でこの問題への若干のアプローチを試みよう。

### 3. 美学の分野の動向

スターリン死後の時期におけるソヴェト文学、芸術、文学＝芸術理論の発展の精密な探査は、独立したひとつの根本的研究を必要とする。本節では、ソヴェト、マルクス主義思想の新動向のいわば「人間学的基盤」を解明する一手段として、その簡単な検討を試みるものである。

自然科学はもとより、他の哲学、社会科学と比較しても、美学ないし文学理論の分野の新動向は、遙かに不明瞭であり、突きとめにくい。

したがって、美学的観念と美学的諸理論に押し寄せている《新しい波》を探るためには、体系的に論述されない個々の作家の発言の検討をも含めなければならない。

新動向のもっとも根源的な要求——それは芸術的創造における芸術家の内発的自由への要求と、手法、主題の多様性の主張である。

59年の「第3回全連邦作家大会」における **Кирсанов** のつぎの発言は、この要求が現在のソ連作家にいかに根強く存在しているかを示すとともに、この分野での新動向が持つ意義の深さをも逆に物語っている。

「……新しい、大胆な、多彩な描写にたいするこのような不寛容は、共産主義にとってほんとうに必要なものであるのか？ わたしはそう思わない。……われわれソ連作家は、われわれの制度を、われわれのソヴェトの生活を心底から支持している。われわれは、われわれの運動の前進に力を捧げることを希望し、いつさいの新しいもの、党がわれわれに呼びかけるいつさいのものを支持しようと望んでいる。われわれは、ソヴェト以外のなにものをも支持しない。しかし、手法は多様でなければならない。ひとは万人に同一の児童の筆跡を教えるてはならない。」<sup>1)</sup>

手法の多様性の要求は、描写対象と、対象にたいする創作者の態度のある変化を前提している。美化された現実と観念的に造型された「英雄」の描写から「恐怖も悲しみも知る生きた人間」の描写への移行——ショーロホフの「人間の運命」を想起——は、ソヴェト的人間観におけるひとつの発展、——「いわば社会主義的市民」社会への変容を表現している。

「われわれの社会にとっていかに有害なものであれ、さまざまな欠陥を、ある弁解、補足、つまりわれわれの成果についての言及なしに書くことは、われわれの習慣になっていない。……これはひとつの迷信、不必要な重苦しい伝統である。もうひとつの有害な伝統は、苦悩についての描写の嫌悪、悲哀のほんのかすかな表示すらへの恐怖である——あたかも、われわれの生活のすべてが、＜肯定的＞な男女の力強い、オプチミスティックな笑いの伴奏としてのみ、青空のもとで過ぎ去ってゆくかのように。」<sup>2)</sup>

1) cf. M. Friedberg, *Socialist Realism: twenty-five later*, «The American Slavic and East European Review», 1960. vol. XIX, No. 2

2) 「文学新聞」59年5月20日号の **К. Паустовский** の文より。(cf. *ibid.*)

芸術的創造は、その自由な姿においては、同時に創造者の思想、感情、情緒の表現である。スターリンの死の直後にかの「第10交響曲」を作曲したショスタコヴィチは、この作品について、つぎのように語った。

「この交響曲のなかで、わたしが意図したものについては、ただつぎのことだけをいわせてほしい。この作品のなかで、わたしは人間の感情と情熱を伝えようと試みたのである。」<sup>3)</sup>

人間生活の全面的な、深い、芸術的にすぐれた描写を、創作者たちの主体的な、全人格的な参与のもとに遂行すること——この基調は、伝統的なマルクス主義的美学体系に新たな要素を導入し、その変革を除々に推進している。

第1に、芸術における美的感情の復位、伝統的な主知主義的美学——「芸術は、他の社会意識の諸形態と同様に、生活の反映であり、現実の反映である」<sup>4)</sup>——から排除されていた美的感覚の位置づけの試みが始まっている。Г. Недошивин は、「美的なものの本質の問題によせて」という論文のなかで、「……これらの美を知覚する過程を、われわれは美的知覚とよび、その成果を美的体験とよぶ。われわれがこの体験の性格をさらに立入って規定しようとするならば、われわれは美的享受について語る事ができる」<sup>5)</sup>と述べ、伝統的美学を自己批判しつつ「われわれの批評と芸術科学には、こんにちまで、<美的享受>という概念にたいする臆病さがあった。われわれはこの概念に、一種の享楽主義、社会的意識の拒否を予想していた。

しかし、これ以上のあやまりはないであろう。享受はけっして実践に敵対しない。享受なしに、どんな美的知覚も存在しない。

美的なものが、もっぱら論理的、合理的にのみ理解できるとする思想は、ことがらのあやまった理解である」<sup>6)</sup>という指摘を行なっている。(強調筆者)。また、В. Разумный は「芸術的普遍化の本質について」のなかで「芸術的映像は、単なる認識の所産ではなく、認識されたものの芸術家による情緒的評価の所産でもある。」<sup>7)</sup>と説いて、芸術的、美的意識の特性を研究している。Недошивин のさきの言葉は、ある意味で暗示的である。

Недошивин がさらに「思惟する頭脳だけが人間の生活と闘争のために用意されているのではなく、意志、情熱、感情もまたそうであるということは重要である」<sup>8)</sup>と語るときに、われわれはここから、人間の多面的な感覚、感情、情緒などをあまりにも主知主義化＝「合理化」してしまった従来のソヴェト的人間観のひとつの重要な変更を予

3) cf. M. Slusser, Soviet Music since the Death of Stalin, «the Annals of the American Academy of political and social science», 1956. Jan.

4) Исторический материализм, Москва, 1954, стр. 428

5) G. Nedoschivin: Zur Frage nach dem Wesen des Ästhetischen, «Kunst und Literatur», 1959, Heft. 2, S. 121

6) ibid., Heft. 3, SS. 236-237

7) См. Вопросы Эстетики, 1959, Москва, стр. 89

8) G. Hedeschiwin, ibid., S. 130

9) В. Скатерищиков, Роль эстетического воспитания в формировании нового человека, «Коммунист», 1959, No. 4. стр. 40 なお、最近の「ジャズ音楽の公認化」を想起せよ。

期し得る。そして、この意識領域——価値志向的、情動的意識や感覚、意志等——の本格的な検討なしに、イデオロギー論の展開も不毛となり、また人間の全人格性に働きかける諸要因の検討は不可能となるであろう。

このような動向の背景にあるものは、ソ連民衆のなかにおこっている文化的価値観の除々たる変化であろう。Скaтepцкoв は「美的教育」の問題を提起した彼の論文のなかで、伝統的な美的価値観が受けている動揺について次のように述べている。「……残念ながら、芸術家たちは多くの場合、彼らの作品の美的性質や、人間の教育にとってその持つ意義を考えていない。このことは、部分的には、芸術家自身が美的趣好の教育をなんらかの仕方で過少評価していること、作家や音楽家、画家たちのあいだに美的観念と趣味志向の現実的本質、相互関係と相互作用の視野が欠けていることから説明される。……暗い作品の創造に向う多くの若い作曲家たちの靈感、少数の画家の標題絵画にたいする関心の欠除、多くの映画製作者たちの、作品にたいする狭い職業的な、純粹に技術的な態度、などの現象に立入って見るならば、これらのすべては、同一の平面にあることがわかる。ここでは、美的観念と趣向の分離、趣味志向と美的観念とは2つのまったく相異なったものだというあやまった観念の実践的表現が問題なのである。」<sup>9)</sup>

美的趣向の主観的、個人的性質の承認と、統一的、集团的組織化の要請とのあいだには現在、ひとつの矛盾が存在していることが明らかである。

第2に、以上の点と関連して、創作活動における主観の積極的役割が強調され、ここから、伝統的な芸術の定義は次第に変化してきた。「それと同時に、きわめて重要なことであるが、現実にたいする美学的関係は、つねに主観的側面、対象にかんする情緒的判断を内包している。それゆえに、美的なもの特殊領域である芸術においては、生活の反映は、主観的関係の表現と不可分に結合しているのである。」<sup>10)</sup>

「芸術＝形象による反映」という周知のテーゼは、マルクスの「現実の実践的＝精神的獲得の一形態」<sup>11)</sup>という言葉に置きかえられようとしている。芸術を外的世界を反映する単なる特殊の認識形態として把握する伝統的なソヴェト的「芸術認識論」は、芸術を創造（＝実践）と享受の総過程として全面的に検討する方向へと、極めて除々にではあるが、進み始めているといえよう。<sup>12)</sup>

しかしながら、美学の分野での新動向は、先述したように、他の分野に比し非常に緩慢であり、他面「修正主義批判」がもっとも烈しく続けられている領域に属する。

それはなぜか。

その理由として、文学、芸術の領域が「スターリン時代」に最大の抑圧を受けていた分野であり、この領域の理論的發展が現実の変容にもっとも立ち遅れたこと、したがって新動向がしばしば、ブルジョアのイデオロギーと評価され得るような無政府的奔騰の可能性を有すること、そしてソ連における新世代の登場と彼らの価値観を、真に創造的

10) G. Nedoschivin, *ibid.*, «Kunst und Literatur», Heft 3, S. 239.

11) 「思想の総体として頭脳のうちに現象する全体は、自身に可能なただひとつの方法で、すなわちこの世界の芸術的な、宗教的な、実践的＝精神的獲得とは異なった仕方で世界を獲得する思惟する頭脳の産物である。」(K. Marx, *Zur Kritik der politischen Ökonomie, Einleitung, Bücherei des Marxismus-Leninismus*, Bd. 15, S. 258)

12) 東欧諸国一とくにソ連以外の諸国では、共通してこのような方向での芸術論建設が始まっているが、この点については「思想」1959年12月の拙稿「マルクス主義美学の根本問題」を参照されたい。

に共産主義建設の道へと結集するにふさわしいあらたな世界史的ヴィジョンが思想、文化の諸成果として結実していない現在の状況を指摘できるであろう。

しかし、芸術にたいするあらたな、全面的な視野の確立にもとづく美学の実証科学化と、他方における美的＝イデオロギー的、教育的機能の新水準への到達は、十分に予期し得るであろう。そしてその前提は、共産主義建設のいっそう高度の発展にもとづく、いっそう全面的な、新たなソヴェト的人間像の形成であろう。

#### 4. 総括的展望

以上の分析を通じて、われわれは「スターリン批判」以後のソ連社会の発展が「批判」以前の路線の単純な延長とはとうていいいえなかなり重大な変化をソヴェト・マルクス主義の思想と理論体系におよぼしつつあることをほぼ確認し得た。

しかしながら、同時に、その変化がマルクス・レーニン主義の本質的解体、ないし根本的原則の修正あるいは放棄としてではなく、従来の諸条件のもとで一面的にのみ展開されていた分野において、発展する事象のより豊富な、全面的な把握へと動く思想の運動の軌跡を示していることは確かである。<sup>1)</sup>

とはいえ、その変化は、今後のソ連史にとってのみならず、世界史の動向全体に重大な影響を有するほどのものであり、またマルクス主義思想史にとっても、1920年代末—30年代の転換<sup>2)</sup>を遙かに凌ぐ重大性を有していると考えられる。科学、技術の巨大な発展と、その深刻なソ連社会の生活様式への影響、社会主義的民主主義の質的前進、文化的水準の高度化は、平和的共存の進展とあいまって、過去の「強行軍的」社会主義建設の時代のマルクス主義思想、理論をして、一方においてはその実証科学化をさらに促進ししかも同時にマルクス主義の持つ強力な全体像把握の武器を活用しつつ、真に全面的な認識を可能とする体系へと再構成されてゆくとともに<sup>3)</sup>、新しい共産主義的人間像の形成を背景として、マルクスが理想とした「全人的人間」の価値体系を創造する動きを進めるであろう。その経過はなお曲折に充ちているが、巨大な経済建設にたいしなおあまりにも遅れている思想的、理論的建設の作業がすでに確実に進行し始めていることは明らかである。それは、多くの伝統的な「ソヴェト批判」を時代おくれにするばかりではなく、新動向とその史的意義に無感覚な多数の「マルクス主義者」をも歴史の背後に追いやってしまうであろう。マルクス主義的思想と理論の「あたらしい段階」はいまはじまったのである。

1) スターリン死後期を時代区分するならば、a) 53—55年7月の時期（新動向の漠とした胎動と自由討議の開始期—「アレクサンドロフ時代」）、b) 55年2月—59年1月の時期（新動向の枠組みが定められつつ、なお模索を続けた時期）、c) 59年2月以降期（実生活との結合が徹底的に強調されその実験が始まった時期）の3つに大別できる。

2) 20年代末—30年代の劇的転換について、B.Moor は《自然生長性》→《意識の強調》と把握し（cf. 《Annals.》, 1956. tan.p.8）、R.A.Bauer は《決定論的マルクス主義》→《主意論的マルクス主義》ととらえている。（cf. R. A. Bauer, *The New Man in Soviet Psychology*, New-york.1952）現在の新動向は、ある意味でこの両者の統一であり、20年代のソヴェト・マルクス主義の部分的ルネサンスを含む（プレハノフ再評価の意義）。

3) この動向は、また、「ブルジョア的諸科学」とのあらたな、内面的な対決—吸収をさらに呼びおこすであろう。

# The Development of the New Trends in Soviet Marxism and Their Historical Significance

by

Tetsuzo Nakano

Most students seem to have agreed to the view that the Soviet Union has been in the great transition after Stalin's death (1953), though the perspectives concerning the future development of changes are variable. In this article we intend to clarify the features and the significances of the ideological changes which are being caused by the social changes in the Soviet Union in post-Stalin era, by analysing the new trends in philosophy in general, historical materialism, and aesthetics.

(1) So far as philosophy in general is concerned, we can recognize some remarkable trends. First, the weight of studies in philosophical problems of natural sciences and techniques has been growing bigger exceedingly: the numbers of articles of these sorts in «Вопросы Философии» —omitting reviews— are 18 in 1954, 22 in 1957, and 44 in 1959 (a quarter of the whole-numbers).

Second, a series of positive studies (concerning history of philosophy, social reality etc.) have begun steadily, and in a clear contrast to those, dogmatic «studies» in dialectical materialism —the dominant type in Stalin-era— are receding.

(2) Recent trends in studies of historical materialism can be characterized by following two attempts: first, urged by the growing need of organic connection with the problems of economic construction in the Soviet Union, positive-sociological studies have started, and relating to that, some philosophers are attempting to refine the basic categories as “basis and superstructure”, “productive crafts and productive relations”, and to introduce some «new» categories (social mood, generation, etc.) to the traditional system of historical materialism, with the intention of real, total cognition of social reality. (cf. the articles of М. Я. Ковальзон, В. Ж. Келле, Б. А. Чадин, А. Г. Харчев, Г. Ж. Глезерман, В. П. Тугаринов. etc. in «В. Ф.» 1956-1960)

Second, side by side with these objective studies, a new Marxist ethics has been required.

(3) In the field of aesthetics, new trends are relatively underdeveloped, though some remarkable changes can be seen.

But, with the changes of Soviet citizen's ways of life and the appearance of new

generation in the Soviet society, the significance of the aesthetic sense and aesthetic feeling has been recognized, and we see the old "intellectualistic" thesis — art is a reflexion of reality — gradually vanishing away.

Soviet Marxism, on the one hand, is in the transition to the positive sciences, and on the other hand, is being required to offer a new worth-symbol. In the tension between these "opposite" tendencies, Soviet marxism has finished his early "enlightening period," and is going forward to the new stage of history of Marxist-thought.